

せんだいこども食堂

1. 団体概要

仙台市で、10代から70代の女性たちが中心となって運営している子供食堂

開催場所；仙台市内3か所

開催日時；月2回

参加費；子供 無料、大人 300円

参加者；10～40名程度

- ・仙台市青葉区で60～90名の子供たちを対象に活動している「折立こども食堂」へ、立上げ支援の他、資金、食材、スタッフ、運営ノウハウ等を提供し、発足から運営が軌道にのるまでの支援を実施。
- ・県内数か所の子供食堂の立上げ支援や運営に係る支援を実施。
- ・NPO・自治体・企業・学校・農家・寺院等の様々な機関をつなぎながら、子供食堂の支援の仕組みづくりを実施。

2. 取組のきっかけ

- ・代表の門間氏は、暴力の被害に遭った女性と子供のサポートを、約20年間にわたりボランティアで取り組んできました。東日本大震災を経験後、被災者支援の活動を通して出会った子供たちとの関わりの中から、震災から5年目の春に「こども食堂」を仙台で始めようと、Facebookや友人・知人を通してメンバー募集をしたのがきっかけです。
- ・当時の仙台・宮城では、子供支援を行っている複数の団体が子供食堂の立上げを検討していましたが、まだまだ震災からの復興・回復に注力しなくてはならない時期だったため、新規事業の子供食堂へ取り組むことができず、断念せざるを得ない状況がありました。そのため、門間氏が仲間を募り、自ら「こども食堂」を立ち上げ、現在に至ります。

3. 食育の取組

①若い世代を中心とした食育の推進

- ・親御さんが、子供を抱っこしながら食事をするのは、両手が使えずなかなか大変です。「こども食堂」では、ボランティアが子供たちと遊んだり、子供たちを見守ったりするので、親御さんもゆっくり食事をとることができ、リフレッシュにつながっているようです。

②多様な暮らしに対応した食育の推進

- ・子供たちが年齢にかかわらず調理や配膳に参加できる仕掛けづくりをしています。親世代、祖父母世代の大人たちと、サンドイッチにはさむ具を選んだり、一緒におむすびを握ったり、いも煮の味付けを2種類から選び、食べ比べができるようにしました。ただ食べるだけでなく、自分で食事を作ったり選んだりする工夫をしています。

- ・せんだいこども食堂では子供たちに食を通じた機会と体験の提供を心がけています。
- ・様々な世代の大人たちと「食堂」という場を通して交流しながら、子供たちは、自己肯定感や自己信頼感等の「自尊心」を育んでいるように感じます。また、自分を大切にしながら自分の意見を相手に伝えたりすると同時に、相手の気持ちや考えを尊重するような場面も見られるようになってきました。
- ・食事を共にすることで心の距離が近くなり、子供だけではなく大人同士も信頼関係が築きやすくなるようです。年代の異なる方同士が、楽しく交流しています。70代のボランティアメンバーに、子育ての相談を度々しにいらっしゃるお母さんもいます。

③健康寿命の延伸につながる食育の推進

- ・家庭ではなかなか食べることがないような珍しい野菜の寄付をいただくことがあります。野菜の切り方、味付け等、毎回様々な工夫を凝らし料理を作っています。食べることや料理や食材に関心を持つお子さんや保護者の方もおり、野菜の種類や調理方法を聞かれる場面も少なくありません。「こども食堂」に通っているうちに、食への関心が高まったり、食の幅が広がることも子供食堂の魅力です。

④食の循環や環境を意識した食育の推進

- ・地元の農家から提供される野菜が新鮮で美味しく、素材のよさを味わうことができます。

⑤食文化の伝承に向けた食育の推進

- ・郷土料理を食べる機会が少ないお子さんが多いようなので、積極的に郷土料理を食べる機会を作っています。
- ・管理栄養士や栄養士、「腕に覚えあり！」の料理が得意な方、管理栄養士を目指し勉強をしている学生さんを中心としたキッチンチームが調理を担当しています。地場の旬の食材を使った、「はらこ飯」や「セリ鍋」「ずんだ餅」をはじめとする郷土料理を積極的に取り入れ、みんなで美味しく囲んでいます。
- ・子供たちに四季折々の風物や旬を感じ・楽しんでもらえるように、メニューやテーブルコーディネート、室内装飾に工夫を凝らしています。

4. 地域との連携等による課題解決

(1) 来てほしい人や家庭の参加（主要課題①）

- ・「こども食堂」のチラシを置いてくださる美容室や病院、お店やカフェ、コミュニティセンターや学校等があります。また、自社の掲示板や看板にチラシを貼ってくださっている事業所もあります。自転車で子供を幼稚園や保育所へ送迎している保護者の中には、自転車のかごに貼って下さる方もおり、地域の方々に御協力をいただきながら、情報拡散・広報告知が進んでいます。
- ・河北新報社をはじめとするマスコミ各社が、「こども食堂」の活動に注目し、よく記事に取り上げています。⇒詳細は「◎連携事例2」

（２）資金の確保（主要課題②）

■運営費の寄付

- ・最も多いのは個人の方からの御寄付です。中には匿名で毎月振り込んでくださる方もいます。
- ・高等学校の生徒さんが自発的に募金活動をしてくださったり、Facebook を通じて国内海外のアーティストの方々100 人がクラウドファンディングをしてくださったりと、たくさんの方から支援を受けています。
- ・多数の企業から御寄付をいただいております。支援企業・団体は 20 以上に上ります。立上げ資金は、みやぎ生活協同組合（みやぎ生協）の助成金を活用しています。会場は、あしなが育英会・みやぎ生協・河北仙販の支援を受けています。

■食材の寄付

- ・地域の生産者の皆さんから野菜やお米の寄付をいただいております。100 キロ単位で一度に大量に寄付していただくこともあり、そのような場合は、他の子供食堂とシェアしています。一般の御家庭から、家庭菜園で採れた野菜の御寄付や頂き物のお米の御寄付をいただくこともあります。
- ・「おてらおやつクラブ」という、お寺に寄進された菓子や果物等を、子供を支援する団体を通して子供たちへ提供する団体から食材の一部の提供を受けています。それ以外にも 4～5 か所のお寺からお菓子や果物のほかに海苔や干し椎茸といった乾物や、洗剤、タオルといった日用品の御寄付をいただいております。これらは、食堂にきた子供たちへ「お土産セット」としてプレゼントしています。
- ・東京の会社員の方たちがお給料の一部を出し合い、気仙沼市のお菓子屋さんのお菓子を購入し、「こども食堂」へお菓子を御寄付くださいました。被災地支援と「こども食堂」支援の両方を大切に、応援してくださいました。

（３）スタッフの負担、スタッフの確保（主要課題③）

- ・スタッフのコアメンバーは 30～60 代の女性 13 名で、全員が働きながら活動をしています。管理栄養士、栄養士、看護師、保育士、教師、カウンセラー、ライター、団体職員、会社員等、様々な仕事に就いています。
- ・社会人ボランティアは日に日に増えています。仙台は、東日本大震災時に「支えてもらった」「助けられた」という経験をされた方も多く、「今度は誰かを支えたい」「お役に立ちたい」との思いの方が多くおられます。また、単身赴任されている方で地域と接点を持ちたいと参加してくださる方もおられます。
- ・学生ボランティアもとても多く、仙台白百合女子大学の他、県内の複数の大学等も参加しています。他県に進学した学生さんが帰省の際に参加してくださることもあります。また、隣県山形の複数の大学からも御参加いただきました。個人での参加が多いですが、ゼミ単位の参加も継続的にあります。
- ・「こども食堂」は、誰でも気軽に関われる活動のひとつではないでしょうか。「おせっかいなおばちゃん・おじちゃん」たちが、多く参加して下さっています。

（４）地域との連携〔主要課題④〕

・平成 28 年 8 月に「こども食堂」の立上げ支援講座に関する勉強会を開催しました。60 名以上の参加があり、山形をはじめとした他県からも御参加がありました。講座受講後に立ち上がった「こども食堂」も多く、顔の見えるつながりができています。同年 12 月には、組織の基盤強化を目指した講座を実施しました。県内の団体に多く御参加いただき、ここでも顔の見えるつながりが生まれていました。

（４）リスク管理（主要課題⑤）

- ・様々な職場で働く管理栄養士・栄養士がメンバーにあり、アレルギーへの配慮、離乳食の提供等を行う場合もあります。
- ・怪我、食中毒等の問題を起こさないことが、「こども食堂」の運営上大切なことのひとつであると考えています。学校等に協力していただきたいと考えても、怪我や事故への対応や衛生管理を行っていない「こども食堂」を、児童・生徒や保護者の方へ勧めることは難しいでしょう。
- ・仙台市役所の協力を得て、職員を講師に迎え、衛生管理講座を平成 29 年 3 月に開催しました。

（５）会場の確保（主要課題⑥）

- ・あしなが育英会・みやぎ生協・河北仙販から、それぞれ会場をお借りしています。

5. せんだいこども食堂が必要としている支援

- ・一人でも多くの方に、地域の子供たちへ関心を寄せていただきたいと願っています。
- ・「こども食堂」は、困難を抱えている子供たちだけが利用している食堂ではありません。「せんだいこども食堂」は、貧困や困難を抱えている・いないに関わらず、子供と保護者の方に利用していただいています。東日本大震災を経験し、平時から「顔の見えるつながり」を築いておくことの大切を学んだからです。いつ誰が困難に遭遇するかわかりません。そんな時に、「こども食堂」を思い出して、来てもらえたらと思います。「こども食堂」の取組が貧困の状況にある子供たちだけにに向けた取組であるという誤解が定着しないように、全ての子供たちが気兼ねせずに利用できるように、マスコミの皆さんには御理解と御協力をお願いしています。
- ・より多くの地域の皆さんと一緒に活動が続けて行きたいと考えています。現場で子供たちに関わっていただくのもよし、パソコンなどの事務スキルを活かして事務局ボランティアとして関わっていただくのもよし。皆さんのお力を発揮する場として、「こども食堂」へぜひ御参加をしていただき、子供たちへ寄り添っていただけたらと思います。

◎連携事例 1：仙台白百合女子大学からの学生ボランティアの参加

1. 取組のきっかけ

- ・仙台白百合女子大学健康栄養学科「応用栄養学」分野の講師である山城 秋美氏が、せんだいこども食堂スタッフの栄養士の紹介で、見学兼ボランティアとして参加したことをきっかけとして、交流が始まりました。山城氏が、ゼミの学生に参加の経験を話したところ、学生から自分も参加してみたいと声があがり、ゼミとして活動に参加することになりました。

2. 連携の仕組み

- ・毎月第 1 日曜日に「あしなが育英会・仙台レインボーハウス」で開催されている開催回に、学生 2～3 名と山城氏がボランティアとして参加し、調理からフロアでの子供たちのフォローまで、様々な役割を担っています。

■ 学生がボランティアとして参加するうえでの工夫・利点

- ・山城氏から学生には、主体的に前に出て、学ぶ姿勢を大切にすることを伝えています。
- ・健康栄養学科の学生なので、大量調理の実習は何度も経験していること、衛生面での注意点（温度管理や衛生的な取扱い）についても知識があることが、ボランティアに活かされています。
- ・“先輩”栄養士の働きぶりを垣間見ることができ、栄養士との人脈ができる等、学生にとってのメリットもあります。また、校内で調理して校内の学生で食べる調理実習等とは異なり、一般の方を相手に食べていただき、リアクションを間近で観察できるというのは貴重な経験です。

■ 学生が参加しやすい点

- ・子供食堂の開催日は毎月固定されているので、数ヶ月先でも予定を組みやすく、ボランティアとして参加しやすいと感じられています。
- ・毎回食堂準備開始時に、今日のメニュー、ポイント等、全体での打ち合わせ時間があるため、慣れていない学生も作業の流れを簡単に理解できます。

◎ 連携事例 2 : 「子どものたより場応援プロジェクト」※、河北新報社、地域創造基金さなぶり※※の協力による、子供食堂の情報発信と資金提供

※ 河北新報社、宮城県、地域創造基金さなぶりの3者が主催者として運営している子供向け支援団体に対する応援基金。子供の貧困支援に取り組む活動団体（子どものたより場）を応援することで、間接的に、宮城県内の子供たちを支援することを目指している。

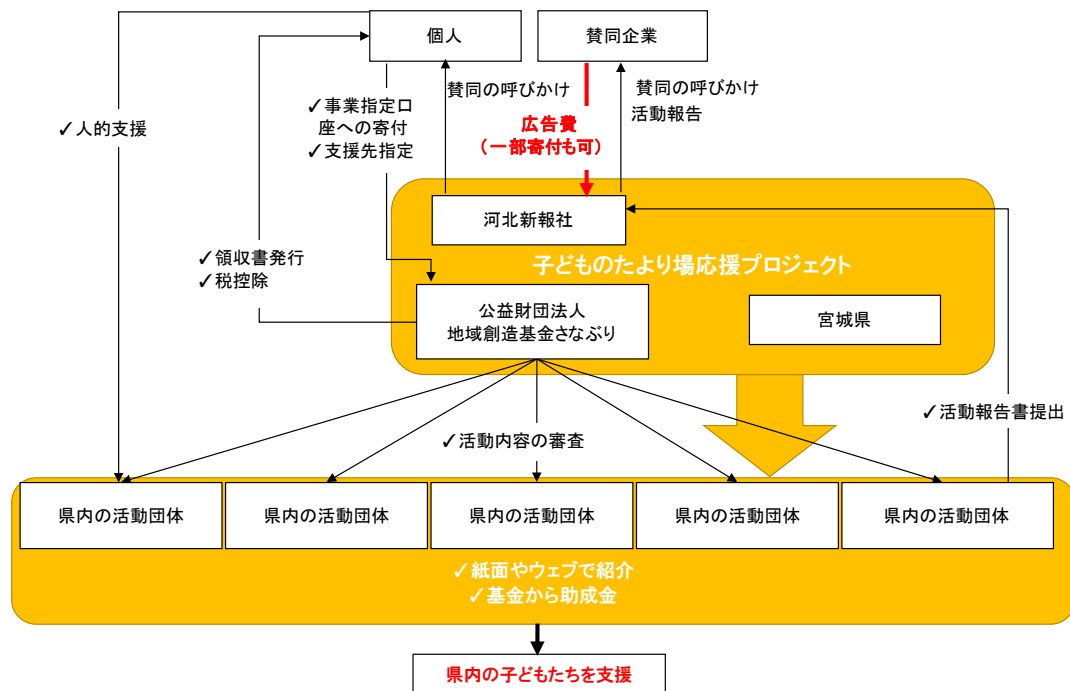
※※ 東日本大震災後に東北の復興と地域の活性化を支えるために設立されたコミュニティ財団。2011 年以降の6年半で総額約 17 億円の資金を調達し累計約 16 億円の支援を行ってきた。

1. 取組のきっかけ

- ・河北新報社の営業マンの一人が、石巻市で震災復興のために被災地の支援をしている NPO 法人から、「避難所にいることで、親から暴力を振るわれることもなく、学生ボランティアと話をしたり、勉強を教えてもらったりできることが嬉しいと話す子供がいる」という話を聞き衝撃を受け、地元のメディアとして子供たちに何かできることはないかと考えるようになったのが取組のきっかけです。
- ・新聞社の強みを生かして、子供の貧困に向き合う地域の活動団体の紹介記事を、広告として継続的に発信することはできないかと考えました。
- ・さんだいこども食堂を含む地域の活動団体からも、情報発信だけでも心強いと、肯定的な意見がありました。
- ・そこで、河北新報社と、基金の運営ノウハウがある「地域創造基金さなぶり」が協力して、広告記事掲載と活動団体を支援する基金の運営を行う「子どものたより場応援プロジェクト」をとりまとめていきました。
- ・「宮城県子どもの貧困対策計画」を策定していた宮城県にも活動に加わってもらいました。貧困対策計画では平成 28 年度から平成 31 年度までの4年間を取組期間と定めているため、プロジェクトの当面の目標も、まずは同じく平成 31 年度までの活動継続と定め、2017 年 2 月に子どものたより場プロジェクトを設立しました。

2. 連携の仕組み

- ・県内の活動団体を紙面やウェブで紹介する他、基金から助成金を出し応援することで、間接的に子供の支援に繋がっています。（次頁図参照）



■ 広告記事の掲載

- ・河北新報社は、「子どものたより場応援プロジェクト」として、賛同企業からの広告費、又は寄付金を集め、子供の貧困支援の取組を伝える特集広告記事や、活動団体への寄付を募る寄付募集告知広告を河北新報に掲載します。2017年には、団体紹介特集（新聞の1面（15段）カラー広告）を5回、寄付募集（紙面1/3（5段））を朝・夕刊に28回掲載しました。
- ・特集広告では、宮城県内で活動している団体を、団体主催者のインタビューを中心に紹介している他、活動にボランティアでかかわっている県民の声も取り上げる構成としています。カラー刷りで写真を多く取り入れ、読み手の関心を喚起するつくりとしています。

【寄付をする企業側のメリット】

- ・特集広告及び寄付募集告知広告には、賛同企業の企業名（企業ロゴ）を紙面に掲載するため、賛同企業にとっては企業名の周知、企業イメージのアップなどにつながる仕組みとなっています。
- ・広告費は1年分で10万円／社。年間30回以上は企業名が掲載されるため、広告費としては非常に割安です。
- ・寄付を出すのは難しいという企業であっても、広告費としてであれば社内の合意をとりやすいというメリットもあります。

【子供食堂にとってのメリット】

- ・紙面で紹介した活動団体は、紙面掲載や記事のSNSでの拡散により、活動が広く知られるようになり、ボランティアの申出が増加した等の効果があったとのこと。

- ・紙面掲載の後は河北新報社に対して手紙や電話で読者からの反響があります。ホームページに掲載した記事の SNS でのシェア率は非常に高く、「いいね」は 300 弱、リーチ率は 1,500 程度になります。
- ・地域の活動に支援者・協力者が集まるようにするには、地域住民の身近な地域での取組に関する情報が市民に届けられることが必要です。ネット等で情報があふれている現在でも、新聞社という信頼のある機関から発信された情報には、大きな信頼と影響力があると考えられます。



(左) 2017 年 4 月 17 日の特集紙面、(右) 2017 年 6 月 30 日の特集紙面

■寄付金、寄付事業

- ・紙面からの寄付の呼びかけや、プロジェクトから企業への働きかけにより、子どものたより場応援基金に、地域の個人・企業から 238 万円、食品メーカーから 900 万円の寄付が寄せられています。

■助成金の贈呈

- ・宮城県内で 2017 年 8 月～10 月に実施される「子どもの居場所の提供を図ろうとする事業」「栄養バランスを考慮した食事の提供や食育に通じる事業」等 6 テーマの事業について、助成対象団体を募集しました。
- ・助成額は上限 15 万円とする区分 1、上限 30 万円とする区分 2 の 2 区分としました。
- ・2017 年は、子供食堂 1 団体を含む 7 団体に、計 150 万円の助成金を贈呈しました。

- ・公平性を担保するため、地域創造基金さなぶりが活動団体の会計審査をおこない、助成団体には活動報告の提出を求めています。助成金の対象となる団体は、貧困に特化した団体もあれば、家族支援を目的としている団体等、様々であり、サポート基準は貧困対策が出来ているかどうかです。

3. 課題・今後の方針

- ・2018 年は子どものたより場である団体や地域住民と皆で考え対話をする円卓会議の開催等を予定しています。

◎連携事例３：秋保ゆうきの会 くまっこ農園からの野菜の提供

１．団体概要

- ・秋保ゆうきの会は、５軒の有機農家が集まった共同出荷組合。

２．取組のきっかけ

- ・取引先の あいコープみやぎを通して先ず宮城野こども食堂に提供し始めて、その活動の意義に感銘を受けてもっと協力したいと思い、「宮城野こども食堂」の青木氏に「宮城県のこども食堂」の先駆者である門間氏を紹介してもらい、そこから「せんだいこども食堂」や他の子供食堂にも広がりました。農家も１１軒になり、「こども食堂支援農家の会」と名付けて活動しています。

３．支援内容

- ・宮城野こども食堂と、せんだいこども食堂に野菜を提供している。月２回×２か所で、多いときは月に４回提供しています。
- ・当初は余剰野菜の提供からスタートしましたが、今では、子供食堂からあらかじめメニューやニーズを聞いてから必要な野菜を提供する体制に変更しています。
- ・はじめは１軒でスタートしましたが、今では共同出荷組合全体５軒に広がり、最近ではさらに４軒の協力を得て、計９軒体制で支援を行っています。
- ・「宮城野こども食堂」では、サトイモやニンジン収穫する農業体験を行い、採った食材で芋煮会を行いました。薪割り、火おこし等も体験してもらい、子供たちに自分で作る大変さを実感してもらいました。

４．課題・今後の方針

- ・顔の見える農家の、新鮮な野菜の提供が、本当の意味での「食育」につながると考えています。
- ・今後は、支援農家を増やし、子供食堂の野菜のニーズに１００％応えられるようにしたいです。
- ・交流機会を増やすとともに、食材教育へもコミットしたいと考えています。